

# 鑑賞教育における知的理解による試み

熊野 佳恵\*・林 徳治・福田 隆眞・山田 晃子\*

The Experiment of Intellectual Understanding in Art Appreciation

KUMANO Yoshie, HAYASHI Tokuji, FUKUDA Takamasa and YAMADA Akiko  
(Received July 25, 2005)

キーワード：鑑賞教育 知的理解 媒体・方法

## はじめに

中学校の美術教育は、平成10年度の学習指導要領の改訂に伴い、鑑賞教育の充実が求められている。鑑賞教育の重要性については、作品を通して多様な価値やコミュニケーション能力の向上などといった観点からも理解が浸透しているように感じる。しかしながら、問題はどのように充実した鑑賞教育を行えばよいのかという点である。

成長過程において、中学校の3年間は人格形成を左右する大切な時期である。また、そのような中学生にとっては、知的欲求を促されることや美的価値能力を形成する機会を得ることは大切であり、その影響力をもっとも受けやすい時期である。よって、今回の研究テーマである実践的な鑑賞方法を試行する対象として、中学生に注目した。

美しいものや過去の偉大な作品を鑑賞することは、単に美しいという思いや感覚的な理解にとどまるだけではなく、なぜ、美しいと感じたのかを論理的に理解できるためにも一定の知識の獲得は必要である。そして、知識の獲得により意味のある鑑賞が可能となる。知的な刺激によって、鑑賞することに興味を持ち理解することは、児童や生徒の成長過程となる人間形成にとっても有効的に影響するように考えられる。

本稿は鑑賞媒体と鑑賞方法の多様化を述べ、鑑賞教育のひとつとして、対話型と知識教授型を実施し、フリートークや知識の伝達が作品の理解やイメージの形成にいかに関連しているかを述べる。そして、それらの方法の意義と改善点を試行した。

## I. 鑑賞教育の意義

ここでは鑑賞教育の意義について、一般的な意義、学校教育での意義、美術館教育での意義の3つの場合に分けて、先行研究をもとに述べる。

### 1. 一般的な意義

教育の究極的な目的は、より善い自己(人間)を形成しようとすることであると考えられ

---

\*山口大学大学院教育学研究科修士課程

る。人間は社会とのかかわり合いの中で自分というものを獲得していく。また、そこから得た刺激や情報を通して、自分を発見することでもある。そして、鑑賞は単なる知識や情報を蓄積するのではなく、他人が創造した作品と触れ合うことにより、他者の存在や自分とは違った感性や価値があることに気付くことができる。鑑賞することは、鑑賞者が作品を通して自己を見つめ直すことであり、より善い自分を発見し形成することを目指すものである<sup>1</sup>。

川村善之は鑑賞の創造性を主張している。鑑賞は単に対象の美を一方向的に受け取ることではない。作品を美的に見ようとしなければ、そこには作品としての価値は生まれてこない。鑑賞することは、作品とのかかわり合いにおいて、美的な感性を創造していく精神活動である。よって、鑑賞教育の主な目標は、作品との触れ合いを鑑賞者自らが持つことで、創造性を高めていくことを目指すことである<sup>2</sup>。

また、鑑賞する意義は、人間が自然や芸術の対象に対して、どのようにかわるかで変わってくる。美術は人間に見られることで初めて成立する芸術である。鑑賞者の意識的な作品とのかかわり合いと見方をもって、鑑賞することの意義が生まれる。

## 2. 学校教育での意義

近年の美術教育のあり方は、表現一辺倒であった従来の教科内容を見直し、鑑賞の独立した扱いや鑑賞と表現の一体化、さらに美術館との連携を示唆している<sup>3</sup>。それまでは、美術教育は表現が主体であり、鑑賞は造形活動への学習効果の高まりを期待したものであった。また、鑑賞教育は名画鑑賞であるというイメージに陥りやすく、作家の表現意図や心情の理解を中心とした鑑賞教育が中心であると捉えられがちであった。

1980年代には鑑賞学習は独立した鑑賞教育として、美術批評や美術史といったより知的な関心のもとにDBAEの考え方に注目している。DBAEの特徴は、美術史、美術批評、美学、表現の4領域の関連性を重視し、鑑賞重視の教育が展開されてきたことである。そのために、児童や生徒は創造者から美術の学習者といった位置づけとなり、見ることを重視した美術教育へと変容していった。また、鑑賞するポイントとして、作品をじっくり見るということをより意識的に扱う必要性に迫られることになったので、教師には見るための方法論を児童や生徒に伝えることが期待される<sup>4</sup>。

知的発達段階において、知的な関心が小学生よりも高いと思われる中学生に対しては、生徒が意識的に作品を見ることで獲得する知識理解や疑問の広がり期待できるように思われる。生徒は美術の学習者として、作品に対して単に美術史としての知識を理解していくのではなく、自分なりの見方を持ちながら知識とイメージが深まっていくことができる。生徒の興味を高めるためには、作品の印象がきれいと感じたとしたら、その理由を納得させることが大切である。そのためには、ある程度の知識の獲得が求められる。よって、鑑賞の意義を高めるためには、児童や生徒の発達段階に応じた鑑賞授業の展開が求められる。

## 3. 美術館教育での意義

アメリカを中心として、1980年代後半から教育普及活動が活発になり、ワークシート、ギャラリートーク、ワークショップといった様々な来館者への教育的な取り組みが行われてきた。生涯教育や社会教育といった観点からも学校との連携を意識した取り組みも見ら

れる。さらには、鑑賞教育が重視されることで美術館が学校との連携を目指し、様々な実践上の問題が浮き彫りとなったことは事実である。そのような取り組みから美術館が問題解決を目指すことで鑑賞教育の意義や方法を見出すことができると思われる<sup>5</sup>。

現在、多くの美術館教育では、実践的な鑑賞としてギャラリートークを行っている。これは、アメリカ・アレナスが紹介した「対話型の鑑賞法」である。アメリカの鑑賞方法は、認知心理学者アビゲイル・ハウゼンの提唱する「鑑賞能力の発達段階」理論をもとにした初心者層に対する実践的なメソッドの一例である<sup>6</sup>。この鑑賞方法の基礎となるものは、ニューヨーク近代美術館の「Visual Thinking Curriculum(視覚を用いて考えるためのカリキュラム)」である。これは、1980年代半ばにニューヨーク近代美術館の教育部部長であるフィリップ・ヤナワインが中心として、ハウゼンの協力のもとに、ニューヨークの公立小学校の教師75名と児童約3,500名を対象として、体系化したものをカリキュラムとして制作した。この制作にはアメリカも参加している<sup>7</sup>。

ヤナワインを中心としたカリキュラム制作の分析によると、美術館に訪れる多くの人は、作品についての知識がほとんどなく、何をどのように鑑賞したらよいか分からないとしている。そのため、美術館の学芸員を中心として、鑑賞者が自分自身の日で見たことから作品を読みといていくことを目指された。学芸員が鑑賞者と作品との間に入り、質問をしたり、意見のとりまとめをしたりして、鑑賞者同士の対話形式で進められる鑑賞方法である。作品を自分なりに解釈し、鑑賞することが楽しく好きになる人口が増えていくことで美術館の存在価値や作品鑑賞の意義を唱えていくことができる。

さらに、美術作品という視覚的要素の強い題材をあえて言語化していくことは簡単ではない。自分の考えを表現することは、意識的に言葉の選択をして正しく伝えるためにある程度の思考する能力が必要とされる。現在の情報化社会の中で、何を見て何を選び取るかという学習はまさに必要不可欠なものであり、美術の鑑賞教育は重要な役目を担うものと考えられる<sup>8</sup>。

## Ⅱ. 鑑賞教育の媒体と方法

鑑賞教育の充実のためには、鑑賞する作品とその方法を理解する必要がある。鑑賞教育において、どのような作品をどのように鑑賞すればよいかを考察する。また、デジタル化社会の進む中、実物と複製の鑑賞についての違いを述べる。

### 1. 鑑賞作品

鑑賞教育において、もっとも効果的な作品鑑賞の方法は実物を鑑賞することである。実物鑑賞の利点は、作品の大きさや素材感を直接的に体験することができることである。実物鑑賞の重要性に着目した動きとして、学校における鑑賞教育と美術館との連携や教育普及活動の活発化が指摘できる。

しかしながら、私たちは常に実物を鑑賞できる機会を持てる訳ではない。実物を鑑賞する以外でも鑑賞する意義はある。その媒体としてあげられるのが、教科書、図版、美術全集である。また、美術館そして特定の展覧会のために製作されたカタログ、ポストカード、カレンダーも同様、貴重な印刷物としての媒体である。

次に挙げられるものは動画や静止画を含む映像である。情報化社会の流れを受けて、テ

レビを初めとして、デジタルカメラやインターネットなど多くの媒体が存在する。その中でも特に便利な媒体は、画面上で多くの美術館のホームページにアクセスが可能で、容易に多様な作品鑑賞ができるインターネットである。

技術が発達した今の時代で、作品鑑賞の媒体は多様化している。しかしながら、もっとも作品を理解し価値のあることは、実物を鑑賞することには変わりはない。実物を鑑賞することしか、価値がないことを意味するのではない。作品鑑賞の目的をはっきり持ち、その内容によって鑑賞方法を正しく選択することが必要とされている。よって、一番重要なことは、媒体の選択権を持っている鑑賞者の意識である。

## 2. 鑑賞方法

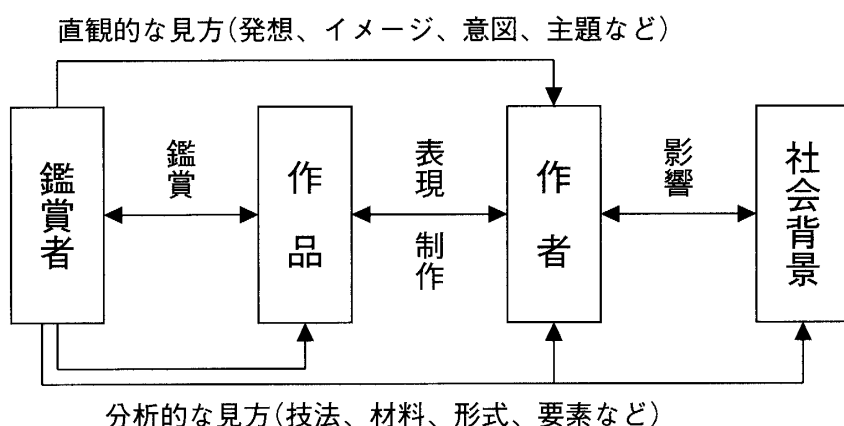
現在の鑑賞方法は大きく分けて3つに分類される。1つ目は、鑑賞者が感じたことを表現することに注目した「対話型の鑑賞法」であるギャラリートークがあげられる。ギャラリートークは、作品について自分の感じたことを言葉で表現し、他の鑑賞者(児童・生徒)と直にコミュニケーションをはかり、その反応を確認できる双方向性のある方法である。ギャラリートークの特徴は、答えが1つではないことである。そして、他の鑑賞者(児童・生徒)の考えを聞きながら、作品に対する多様な見方を深めていくことができることである。ギャラリートークは、見ることから始まり、感じたことを言葉で表すことで、作品を自分で解釈することができたという満足感や達成感を持つことができる。そして、教師や学芸員は鑑賞者(児童・生徒)にとって、作品に対する親しみが深まることや鑑賞することが好きになることを期待する。

このギャラリートークで重要な部分は、教師や学芸員などが鑑賞者(児童・生徒)と作品との間に立ち、ナビゲーターとしてサポートする力量である。鑑賞者同士の一方的な発言だけでは作品を解釈することが難しい。また、多様な意見の中で、お互いを認め合いながらそれぞれの意見を共有するためにも経験を積んだナビゲーターが必要である。そのようなナビゲーターは誰にでも可能ではないので、ギャラリートークにとって楽しいトークを実現するためには、ナビゲーターの重要性を忘れてはいけない。

2つ目は、ギャラリートークと類似しているが、学習中心の方法がある。これは、作品鑑賞を中心に授業を行うが、鑑賞者(児童・生徒)の感じたことを重視しており、知識の伝達はあまり行わない。知識をあまり教えないので、作品を鑑賞しても何となく理解したという程度であり、具体性や共通理解が難しいといった問題点があげられる。また、表現活動につながる鑑賞を目的としているため、鑑賞者(児童・生徒)の創造への意欲や発想が高まることを重視している<sup>9</sup>。

3つ目は、教授による伝達理解がある。これは、学習中心の鑑賞方法が鑑賞者主体であるのに対して、一般的には指導者が主体となっている。学習の効果を高めるために、直観的な見方や知識理解による5つの観点から鑑賞を行う。5つの観点とは、①美術史的観点②技術、技法の観点③造形要素の観点④主題や発想の観点⑤用途や機能の観点である。また、学習の効率を高めるために、鑑賞の構造を以下のように図式化した。直観的な見方からは作者の表現意図やイメージを理解し、知的理解からは分析的な理解を獲得することができる<sup>10</sup>。

## 観点の構造



(「美術科教育の基礎知識」より)

直観的な見方は、鑑賞者(児童・生徒)の感性を高め、多様な発想力の育成に優れている。作品に対してのイメージを持つことで、鑑賞者(児童・生徒)が感じたことをより明確に表現することができる。しかしながら、見ることや知っているだけでは、作品を正しく理解したことにはならない。分析する能力を持って、論理的な見方をすることで深い理解が得られる。イメージ先行ではなく、論理的な思考回路で判断・理解する重要性にも注目する必要がある。

### 3. 実物と複製の鑑賞

電子情報が普及している今日、「本物主義」と「デジタル化された画像を含めた複製利用を認める主義」のどちらが正しいかという両者の主張は、実物であるという価値を揺るがす議論の要因となっている。多様化する芸術領域の中で、本物かそうでないかという事実だけで、その作品に対する芸術性への価値を評価してはいけない状況となっている。また、複製された作品は、進化した時代の副産物でもあり、私たちが新しい価値観や審美眼を持って評価しなくてはいけない時期に到達していると解釈できる<sup>11</sup>。

芸術の領域におけるデジタル化の波は、全国の美術館や博物館などによる7,000以上のサイトから情報の検索が可能であることから影響力の大きさを実感させられる。美術館などの施設は、所蔵のコレクションを中心として、デジタル資料として多くの作品のデータを保存している<sup>12</sup>。

デジタル化社会が生んだ新しいコミュニケーションの形態が、「本物主義」と「デジタル化された画像を含めた複製利用を認める主義」の議論を生んだと言えるであろう。本物だけが価値のあることだという考えは改めて、多様に変化していく社会に対する適応力を見つけていくことが大切である。

## Ⅲ. 中学校における鑑賞の目標と実践例

I章では鑑賞教育の意義について大きく3つに分類して述べたが、具体的に中学校の教育課程といった限定した領域から、鑑賞教育の目的と問題点を探ってみることにした。留意点として鑑賞する意義を高めるためには、目的に応じた鑑賞作品と鑑賞方法を選択する

ことが大切であるように思われる。

まず、中学校の鑑賞教育における目標を学年別に述べる。1学年の目標は、鑑賞の楽しさを実感することである。また、鑑賞に対して親しみが持てるように、身近な生徒の作品や日本を含む世界の著名な作品を鑑賞する。作品を鑑賞する際に、作品を通して作者の心情や意図と表現の工夫を感じ取り、多様な表現のよさや美しさを味わう。さらに、作品を通して生徒の発見や感じたことを生徒同士で批判し合ったりすることで、生徒の見方や理解を深めることのできる機会を作ることが大切である<sup>13</sup>。

2学年及び3学年の目標は、1学年で学習した基本的な鑑賞のあり方や方法をさらに深めていくことである。作品を比較しながら鑑賞することで、鑑賞に対する理解がより深まることを目指す。鑑賞方法を工夫することは、作品をより深く読み取れるような学習ができる<sup>14</sup>。

以上のような教育課程の目標を踏まえて授業実践を行った。その鑑賞授業は、2つの方法で実施し、生徒の興味や理解についての広がりや差を検証した。1つ目は、「対話型の鑑賞授業」により生徒の個性や感受性を重視した鑑賞授業を行う。生徒が主体となり、自分で作品を解釈し理解していくために、生徒の充実感や満足感の獲得により、鑑賞に対する親しみや楽しみを与えることができると思われる。2つ目は、「知識教授を中心とした鑑賞授業」の方法で行う。作品や背景を理解することで、どれくらい生徒の作品に対する興味やイメージが広がるかどうかを検証する。詳しい授業の方法・内容とその結果を以下の通りにまとめた。

## 1. 研究計画の方法と内容

- パワーポイントを使って、作品を鑑賞する授業の展開

A組:対話型の鑑賞授業

B組:知識教授の鑑賞授業

- 感じたことを中心とした見方と知的な理解に基づく見方による理解の違いを分析
- 知識理解を深めるために、B組の生徒に対して資料を配り、詳しい説明をする。
- 鑑賞授業の後に、プリントに感じたことや分かったことについて記述してもらう。

## 2. 研究対象

山口大学教育学部附属山口中学校2学年(AおよびB組:各40人)

## 3. 実施日時

平成17年7月12日(火) 2、3校時

題材名 狩野永徳作「唐獅子図屏風」(出典:「日本美術館」小学館)

題材の目標

- 対話型の鑑賞については、多様な発想の獲得と生徒自身が作品鑑賞をしたという充実感を持つ。
- 知識教授の鑑賞については、作品についての共通理解と知的な興味やイメージの広がりを持つ。

#### 4. 指導計画(各組ともに総時間数1時間)

##### A組(対話型の鑑賞授業)

次	時数	学 習 活 動	評価の観点	備 考
1	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教科書に載っている作品で狩野永徳作「唐獅子図屏風」を鑑賞する。</li> <li>○ まず、作品をじっくり見る。 (発見と吟味)</li> <li>○ 作品について気付いたことや感じたことを発表してもらう。 (比較と転換)</li> <li>○ 生徒の発言をつなぎあわせてまとめていく。 (統合)</li> <li>○ 生徒全員に「どのようなことが作品を見てわかったか。また、感じたか」を記述してもらう。</li> <li>○ 2-3人の生徒の感想を発表してもらう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 感じたことを自由に発言できているか。</li> <li>○ 他人の発言に注目できているか。また、その影響力はどれくらいあるか。</li> <li>○ 作品を自分の力で解釈したという充実感と達成感を持っているか。</li> <li>○ 発言に多様な個性がみられるか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ パソコンで作品の画像を見せる。</li> <li>○ 全員に感想を書くためのプリントを配る。</li> </ul>

##### B組(知識伝授を主とした鑑賞授業)

次	時数	学 習 活 動	評価の観点	備 考
1	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教科書に載っている作品で狩野永徳作「唐獅子図屏風」を鑑賞する。</li> <li>○ 知識を獲得しながら作品の理解ができるように、作品・作者・技法・社会的背景などについての詳しい説明をする。</li> <li>○ 生徒からの質問はないか聞いてみる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 作品に対して知識による理解が充分できているか。</li> <li>○ 作品に対するイメージはどれくらい膨らんでいるか。</li> <li>○ 1枚の絵からどれくらいの質問が生まれるか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ パソコンで作品の画像を見せる。</li> <li>○ 関連した作品や物の映像を見せる。</li> </ul>

	<p>○ 生徒全員に「どのようなことが作品を見てわかったか。また、感じたか」を記述してもらおう。</p> <p>○ 2－3人の生徒の感想を発表してもらおう。</p>	<p>○ 生徒の作品を見る目の変化はどうか。</p> <p>○ 共通理解はどのくらいできているか。</p> <p>○ 教えた知識以外の意見はどうか。</p> <p>○ 知識が増えると発想の広がりかどうか。</p>	<p>○ 全員に感想を書くためのプリントを配る。</p>
--	--	--	------------------------------

## 5. 研究結果

### －対話型の鑑賞のA組－

#### ●生徒からの感想

- 美術は答えが1つではなく、そこから色々なことを考えていけるのが美術のよさかなと思った。
- 唐獅子の強さがよく表されていて、作品鑑賞に興味を持った。
- 時代の違いを感じた。
- 意見を言い合うことにより、色々な意見があることが分かった。自分の考えを進んで発表することができなくて残念であった。
- 作者の意図と違っているかもしれないが、自分なりに作品の理解ができてよかった。
- 1人で鑑賞するよりも多くの人数で鑑賞すると作品に対する考えを多く持てるので、みんなで考えることは大事だと思った。
- 作品を見るときには「想像力」を大切にしていきたいと思った。
- 作品に対して自分が思ったことと違う意見を持った人の意見を尊重しなくてはいけないと思った。また、1つの絵からでも色々なことが読めてくると思った。
- 絵を見ることは、人から聞いたり調べたりするよりずっと楽しいと思った。
- 考える事が楽しく感じられた。
- 見方を変えると新しい発見につながっていく事もあった。

#### ●生徒への質問とその返答について

- なにが見える？ なんでもいいから話して。  
獅子・こま犬・豚・シーサー・ライオン・キリンビールに描かれているモチーフ・顔は獅子で体は羊
- 2頭の動物は何をしていると思う？  
・散歩をしている。



- ・デートをしている。
- ・親の獅子が子どもの獅子を谷から突き落とそうとしている。
- ・森の中にいる。

○絵の下の部分は何が描かれていると思いますか？

地面・川の中・雲

—知識教授の鑑賞のB組—

●生徒からの感想

- 屏風は対になっていて、左と右があることを初めて知った。
- 自分が描きたいものを一番大きく中心に描くことにびっくりした。
- 想像で絵を描くことがあるのだと思った。
- 絵の制作にかなり長い時間をかけたのだろうと思った。
- 中心の獅子は戦国武将の強さを表しているので、すごい気迫を感じた。
- 今までは何気なく見ていたけど、深く観ていくと、色々なことが屏風で表現されていることが分かった。屏風の描かれた背景などが分かってとてもよかった。
- 教科書に載っている作品であるが、こんなに大きな作品だとは思わなかった。
- 地面と雲を同じ金地の中に描くというアイデアはすごいなと思った。
- 想像して描いた絵なのに、筋肉のつき方や背中丸い所など本物のような感じが出て、1つのものに関してものすごい時間をかけて制作されたことが分かった。
- 絵画もそれ以外の芸術でも、その時代の影響を大きく受けているのだと思った。
- 桃山時代の弱肉強食の下剋上の風潮の中で、力強い作品が生まれたのは納得できるといった感じを受けた。
- 狩野永徳の作品がもっと他にも残っていたら、どんなものか知ってみたいと思った。
- どのような人が屏風を作ったか、どのような人の手にその屏風が渡ったのかなどが分かった。様々な様子をこの屏風1つで表現していることに驚いた。
- 色のつけ方や筆などが現在とまったくと違っていいほど違って、狩野派の人たちは大変高い技術を持っていたことが分かった。
- 獅子を荒々しく描くための工夫がいろいろされていて、今にも飛び出してくるような獅子の感じが生々しかった。
- 常信の獅子よりも永徳の獅子の方が力強く工夫がいっぱいあり、生きているような絵をかける人だと思った。
- わら筆で描いていることに驚いた。
- この絵を見たことはあったが、解説を聞いて色々なことを初めて知りました。また、作品の用途が陣屋屏風であったことについては驚いた。

6. アンケート結果 (A組40人・B組40人)

- 大変興味を持った (A 11人 : B 15人)
- まあまあよかった (A 25人 : B 22人)
- あまり関心を持たなかった (A 4人 : B 1人)
- 無回答 (A 0人 : B 2人)

## 7. 生徒の感想におけるキーワード

### A組

- ひとりひとりの見方が違う。
- 感じ方の違いを大切にしたい。
- みんなでする美術鑑賞は楽しい。
- 鑑賞に興味を持った。
- 獅子は迫力があって強そうである。

### B組

- 狩野永徳はすごい技術を持った人だった。
- 狩野永徳はすごい発想力と想像力を持っている。
- 獅子の筋肉の表現方法はすごいと思った。
- 屏風の大きさに驚いた。
- 制作するのに長い時間がかかったのではないかと思った。
- 時代背景と絵は深く結びついている。
- 作品の名前は知っていたが、詳しい内容を知ることができた。
- 屏風における多様な工夫に驚いた。

A組の感想では、ほとんどの生徒が多様な見方と意見があることを実感し、感じ方の違いを大切にしたいと記述している。また、意見を言い合ううちに鑑賞する楽しさを感じるとともに、鑑賞に対しての興味が深まったようである。そして、自分の感じ方に自信を持ち、意識的に作品を鑑賞する姿勢が深まったように見受けられた。

一方、B組の生徒に対しても鑑賞する楽しさを実感していたが、狩野永徳の技術力や発想力といった作品における工夫に着目した意見が多かった。また、屏風の大きさや役割と時代背景についての記述も多く見られた。A組では出なかった意見としては、作品について以前から知っていたが、詳しい事は知らなかったというものがあった。B組については、1つの作品を多様な観点から鑑賞する楽しさが味わえたように見受けられた。また、知識教授を主体とした授業なので、歴史的な事実を踏まえながらの解説によって、生徒の知的な理解と興味の広がりを持たせることができた。

## 8. 今回の鑑賞授業についての考察

対話型の鑑賞において、作品についての自分の考えを発表することで、他人との意見の違いを知り、お互いを尊重する気持ちが生まれることが分かった。また、生徒同士が1つの絵に関して多くの意見や見方ができることを知ることで、作品や鑑賞することへの興味が深まった。

授業の最後に、生徒の意見を共有するだけに終わらず、作品についての簡単な説明をした。生徒は自分の感じたことや思ったことが、作者の意図と比べて、同じであったかどうかを判断していた。感じたことを共有するだけでなく、作品に対する理解やイメージを深めるためには、ある程度の知識が必要であり、自分の見方と知識を融合させることでより効果的な鑑賞を行うことができると感じた。

知識教授の鑑賞において、解説により作品の作者、制作された時代背景、用途などの知

識を生徒が得たことで複合的な理解や興味を持ったと考えられる。また、作品についての技法や価値だけでなく、狩野永徳の絵師としてのすばらしさを理解していたようだ。また、これまでに社会科や美術などの図版では見たことがあったが、作品理解にまでは至っていなかった。他教科との連携を深めていくことは今後の課題の1つである。また、作品を鑑賞させる際に、知識を与える方法が言葉だけでなく映像などを使うと、より理解が深まる鑑賞ができると思われる。

興味の度合いを調べたアンケートの結果を分析すると、大変興味を持った生徒は知識教授の組の方が多かった。また、あまり関心を持たなかった生徒の数も少ないことから、生徒の知的欲求が高いことがうかがえる。知識を獲得することで広がる興味の獲得を目指す授業を展開する意義を感じた。作品鑑賞を通じて感じたことに対する理由や疑問を解決する手段として、知識を与えることは有効的な手法の1つであることを提案する。

アンケート結果によると、A、B組ともに半数前後の生徒がまあまあよかったと感じている。その中の多数の生徒は、具体的な感想をA4サイズの紙に対して、半分以上のスペースに記述していた。中学2年生は自分なりに感じたことや理解したことを言語化して表現できる。このような知的レベルに着目し、鑑賞教育のあり方をさらに研究する意義を感じた。

## まとめ

鑑賞教育が注目されている中、鑑賞教育の意義を見直すとともに明確な方法論が必要とされている。小学校と違って、中学校の美術教育は美術を専門とした教師が担当している。しかし、その全ての教師が鑑賞教育について多くの経験と知識を持っているとは言えないだろう。独立した鑑賞として捉えたときに、明確な目的を持つことでその方法論が正しく選択できる。また、教師の一方的な教え込みではなく、生徒の興味や反応に対応しながら、授業を組み立てていくことが必要である。

今回の山口大学教育学部附属山口中学校での鑑賞授業の結果を参考にすると、生徒の興味やイメージを深めるためには、生徒の持った疑問を解決することが大切であるように思われる。解決方法の一例ではあるが、歴史的な事実などを含む知識を伝授しながら、知的理解の場を与えることは効果的と言える。また、対話型の鑑賞法の授業で、生徒が感じた感覚的な見方についても、言語化することで自分の意見に対する理解や興味の広がりを持たせることは大切である。

現在の鑑賞教育では、実践的な鑑賞授業であるギャラリートークへの関心が深まっていることは事実である。中学生の知的成長のレベルを上げるためには、直観力や言語力を磨くだけに留まらず、根拠となる知識の獲得が重要な役割を占めている。鑑賞教育を改善する留意点として、生徒に興味やイメージの広がりを持たすためには、知識を伝授する必要性があることを提案したい。

最後に、本稿では実践事例の山口大学教育学部附属山口中学校2年生（計80名）、計2時間のみの授業内容であったため、鑑賞教育の有効性について十分な検証が行えなかった。また授業後に実施した生徒への感想文やアンケートについても、カテゴリー別による内容の分析が不十分であった。しかし、本実践を通して中学生を対象とした鑑賞教育（内容・方法）の実践について有益な示唆を得ることができた。今後は、前述した鑑賞教育による

教育効果についてさらに実証するために、学習成果を測定する設問内容の検討、継続した授業時間によるカリキュラム開発、効果的な授業を実施する上で重要となるモジュール教材の開発を目指したい。

## 注

- 1 寺島洋子「美術館教育のミッションー学校との連携から」(福本謹一他編「美術フォーラム21」11号収録) 醍醐書房, 2005, p91
- 2 川上善之「美術の鑑賞教育」日本文教出版, 1975, pp.32-33
- 3 福本謹一「鑑賞教育再考ー学校と美術館を取り結ぶもの」(前提書1) p84
- 4 福本謹一(前提書3) p84  
福本謹一「アイスナーの美術教育とDBAEについて述べよ」(宮脇理監「美術教育の基礎知識」収録)建帛社, 1985, p50
- 5 福本謹一(前提書3) p85
- 6 岡本芳枝「鑑賞能力の発達段階理論とMoMAの鑑賞教育」(山本朝彦他編「美術鑑賞宣言」収録)日本文教出版, 2003, pp.280-281
- 7 アメリア・アレナス「みる・かんがえる・はなす」(木下哲夫訳, 淡交社, 2001) p iii
- 8 岡本芳枝(前提書6) pp.280-281
- 9 福田隆真「鑑賞教育におけるいろいろな観点について述べよ」(前提書4) p151
- 10 福田隆真(前提書9) p151
- 11 塚原晃「電子情報と美術館」(加藤哲弘他編「変貌する美術館」収録)昭和堂, 2001 pp.99-100
- 12 塚原晃(前提書11) pp.94-102
- 13 文部省「中学校学習指導要領(平成10年12月)解説-美術編-」開隆堂出版, 2002, pp.88-91
- 14 文部省(前提書13) pp.94-95

## 付記

本稿の作成にあたり山口大学教育学部附属山口中学校野崎誠教諭、ならびに2年A, B組の生徒さんに御協力をいただきました感謝の意を表します。